

[報告]

沖縄戦の記憶をつなぐ場・記録・人

—沖縄戦体験継承視察報告—

木下浩・澤田大介・鈴木陽子・田村朋久・辻央・橋本彩香・吉國元⁽¹⁾

はじめに

2019年に発足した「ハンセン病語り部機能継承勉強会」は、日本国内の先進的な体験継承の取り組みから、また先進地の博物館等を訪れ、現状や課題について、学んできた⁽²⁾。視察候補地の一つとして沖縄は当初から挙げられていたが、沖縄で展開されている多様な取り組みを学ぶための時間と経費の問題から初年度の視察候補地からは外れ、翌年度の候補地となった。しかし、新型コロ

ナウイルス感染症拡大による活動制限のなかで、沖縄視察は見送られ、コロナ禍が小康状態となった2023年1月10日から13日にかけて、ようやく沖縄視察実施の運びとなった(表1)。

本視察には、候補地や講師の選定など計画段階から沖縄愛楽園交流会館が大きく関わり、実施までの調整、県外からの参加者受け入れを担った。そのため、各報告に先立ち、本視察の目的と沖縄において現在多くの沖縄戦非体験者により展開さ

表1 ハンセン病語り部機能継承勉強会沖縄視察日程

2023年

1/10 (火) 9:00	集合：モノレール那覇空港駅1階 入壕体験(糸数アブチラガマ)、平和の礎 ガイド：川満彰氏(沖縄平和ネットワークガイド・大学非常勤講師)
14:00	南風原町立南風原文化センター 展示見学、入壕体験(南風原陸軍病院壕) 平良次子氏(同センター館長)講話「南風原文化センターの「平和」事業」
【那覇市泊】	
1/11 (水) 9:00	世界遺産座喜味城跡 ユンタンザミュージアム 上地克哉氏(読谷村文化振興課課長)講話「臭いの再現展示について」
10:30	チビチリガマ ガイド：比嘉涼子氏(読谷地域ガイド風の会)
午後	沖縄愛楽園交流会館展示見学
【沖縄愛楽園泊】	
1/12 (木) 9:30	嘉数高台公園、沖縄国際大学米軍ヘリコプター墜落跡 ガイド：Smilife(沖縄国際大学平和ガイドサークル)
13:00	佐喜真美術館 展示見学 佐喜真道男氏(同館館長)講話「アートがつなぐ場所と記憶」
15:30	ぎのわんセミナーハウス 山城彰子氏(地域史編纂・大学非常勤講師)講話「沖縄の地域史の取り組みの紹介」
【那覇市泊】	
1/13 (金) 9:00	ひめゆり平和祈念資料館 展示見学 尾鍋拓美氏(同館説明員)講話「ひめゆり平和祈念資料館の次世代継承と今後の課題」
13:00	解散：那覇空港

(1) 木下浩(長島愛生園歴史館学芸員〔視察当時〕)、澤田大介(松丘保養園社会交流会館学芸員)、鈴木陽子(沖縄愛楽園交流会館学芸員)、田村朋久(長島愛生園歴史館主任学芸員)、辻央(沖縄愛楽園交流会館主任学芸員)、橋本彩香(国立ハンセン病資料館事業部資料管理課学芸員)、吉國元(国立ハンセン病資料館事業部事業課学芸員)

(2) 「ハンセン病語り部機能継承勉強会」やこれまでの活動については田村朋久「ハンセン病体験者の語り部機能継承に関する調査報告」(『国立ハンセン病資料館研究紀要』第7号、2020年3月)参照。

れている「平和ガイド」と呼ばれる活動について述べておきたい。

視察最終日に訪れたひめゆり平和祈念資料館の尾鍋拓美説明員が述べたように、体験を伝える活動や非体験者への継承に大きな役割を果たしてきた元ひめゆり学徒のような人々も、戦後すぐに自身の体験を語り始めたのではなかった。沖縄近現代史家の新崎盛暉は、「歴史的体験は、現実の課題を通して、はじめて社会全体に共有化される。それが戦争体験の風化現象を押し戻す」⁽³⁾と指摘しているが、米軍基地に起因する事件・事故などが起きるたびに、沖縄戦の記憶が想起され、体験の語りやその記録へとつながってきた。沖縄戦に関する場所と体験記録、伝える人の存在が連環しながら、「現実の課題を通して」継承に関する活動を多様に展開させ、深化させてきた。

短期間の視察で、沖縄戦体験継承をめぐるこれまでの経緯についてどれだけ参加者の理解を深めることができたかは心もとないが、沖縄視察の眼目は沖縄戦体験継承の現在の幅広さや多様さを知ることと、そこに介在する人の重要性である。また、沖縄で展開する継承活動から、勤務する館で可能な取り組みを考えてもらうことにあった。

沖縄で展開されてきた沖縄戦非体験者による「平和ガイド」活動の要諦は、住民視点の「沖縄戦の実相」を伝えることにある。歴史のなかでややもすれば後景に置かれてしまう個別の生への視線を強く意識したものであるが、このような視点は最初から存在したわけではなかった。

沖縄戦などの戦没者への式典が各地で開催される6月23日「慰霊の日」は、第32軍司令官牛島満と参謀長、長勇が「最後まで敢闘し悠久の大義に生くべし」と残存部隊への戦闘継続命令を残し自決した日である(22日説もある)⁽⁴⁾。戦争は対立す

る国や組織による武力衝突であり、沖縄戦が日本軍と米軍などの作戦行動やその記録と無縁になることはないが、犠牲になった住民などの体験や視点は意識的に、また無意識的に後景に置かれてきた。近年の例としては、最新映像技術を駆使し、前田高地をめぐる日本軍とアメリカ軍の戦闘を一人の衛生兵の視点から描いたメル・ギブソン監督の映画「ハクソーリッジ」(2016年公開)がある。前田高地に隣接する前田や仲間集落では、それぞれの戦死率は58.8% (549名)、55.3% (278名)、一家全滅は29.4% (59戸)と32.8% (41戸)に達するが⁽⁵⁾、住民の姿はスクリーンにほとんど描かれなかった。

沖縄戦体験記録の歴史的な流れを振り返ると、例外はあるものの、沖縄県外出身軍人の個別の戦争体験や防衛庁(現・防衛省)の戦史叢書⁽⁶⁾など作戦レベルや戦闘レベルの記録が先行した⁽⁷⁾。「復帰」記念事業として準備が進められ、1975年に開館した平和祈念資料館の展示は、「展示品の約三割は銃砲器や刀剣」といった「軍隊関係の遺物など物資料を中心とした」ものであったため批判を受けたが⁽⁸⁾、沖縄戦認識に向き合う大きな契機となった。

1970年代は、1972年5月の施政権返還や自衛隊配備、沖縄戦戦没者の三十三回忌など沖縄戦を想起する機会が幾度もあり、『沖縄県史 第9巻各論編8 沖縄戦記録1』、『沖縄県史 第10巻各論編9 沖縄戦記録2』⁽⁹⁾の発刊を嚆矢に、市町村史で沖縄戦体験が記録されるなど、住民視点の「平和ガイド」活動へとつながっていった。

(辻 央)

(3) 新崎盛暉『日本にとって沖縄とは何か』(岩波書店、2016年)135頁。

(4) 平仲愛里「沖縄戦最後の戦闘—沖縄本島南部」(吉浜忍・林博史・吉川由紀編『沖縄戦を知る事典—非体験世代が語り継ぐ』吉川弘文館、2019年)50頁。

(5) 浦添市史編集委員会編『浦添市史 第五巻 資料編4 戦争体験記録』(浦添市教育委員会、1984年)341頁。

(6) 1968年に防衛庁防衛研究所戦史室編集による『沖縄方面陸軍作戦』と『沖縄方面海軍作戦』(朝雲新聞社)が刊行されている。

(7) 吉浜忍「沖縄戦記録・研究の歩み」(沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編 第六巻 沖縄戦』沖縄県教育委員会、2017年)727-741頁。屋嘉比取「沖縄戦、米軍占領史を学びなおす—記憶をいかに継承するか」(世織書房、2009年)6-18頁。

(8) 秋山道宏「沖縄戦体験の継承活動」(前掲、『沖縄戦を知る事典—非体験世代が語り継ぐ』)173-176頁。

(9) 琉球政府編『沖縄県史 第9巻各論編8 沖縄戦記録1』(琉球政府、1971年)、沖縄県教育委員会編『沖縄県史 第10巻各論編9 沖縄戦記録2』(沖縄県教育委員会、1974年)。

1. 沖縄戦概要

日本軍にとって沖縄戦は、米軍の本土上陸を遅らせるための捨て石作戦だった。沖縄戦の経験は、各人の年齢や暮らしていた場所、立場によって、それぞれに異なり、壊滅状態になった愛楽園に隔離された人々の経験も、その一つである。本節では、人々が経験した沖縄戦について、沖縄がどのように位置づけられていたのか、また、沖縄戦がどのように展開したのかを概観する。

1) 沖縄の位置づけ

1942年6月のミッドウェー海戦以降、日本軍は敗北を続け、アッツ島など北太平洋の島々でも敗北すると、1943年9月、大本営は絶対国防圏を設定し、沖縄をこの地域を背後から援護する島と位置づけた。1944年3月に創設された第32軍は、4月、航空決戦準備と飛行場の確保を目的に沖縄に配備され、一般住民を動員して読谷・嘉手納・伊江島の他、小禄、石垣などに飛行場の建設を進めた。6月にマリアナが陥落すると、台湾・沖縄の圏内で米軍を迎え撃つ島として沖縄は位置づけられ、第32軍は関東軍や中国戦線から兵力が増強された⁽¹⁰⁾。一方、戦争の足手まといになる「幼老婦女子」・病人の県外疎開が始まった⁽¹¹⁾。

2) 沖縄戦概要

1944年10月10日、レイテ島の奪回を目指す米軍は、日本軍の補給路を断つ目的で沖縄に大規模な攻撃を行った（十・十空襲）。その後、第32軍は本土決戦を遅らせるために、陣地構築を行って沖縄に上陸する米軍を迎え撃つ方針に変更し、中学生・師範学校生の鉄血勤皇隊、高等女学校・女子師範学校生の学徒看護隊を編成した。また、防衛隊、義勇隊、挺身隊を組織して食料調達や軍作業にあたらせた⁽¹²⁾。米軍は3月23日から南西諸島全域を空襲し、26日、沖縄島攻撃の拠点入手を目的

に慶良間諸島に上陸、4月1日には沖縄島中部の読谷から上陸した。米軍は南北二手に分かれて進み、嘉数・前田高地等は南下する米軍と待ち構える日本軍の激戦地となった。米軍は支配地を拡大しながら住民を収容所に移動させ、住民がいなくなった土地は現在の米軍基地へと続く米軍使用の土地になった⁽¹³⁾。

高地を奪われた第32軍は首里の司令部壕から撤退し、沖縄南端の摩文仁まで敗走した。軍民が雑居する南部では敗走する軍と避難してくる住民が逃げ惑った。一方、北上した米軍部隊は、4月13日には北端の辺戸岬に到着し、飛行場のあった伊江島や本部半島八重岳では激しい戦闘が行われた。北部は中南部から避難していた疎開民と、米軍によって住民収容所に移動された人々で溢れかえった。沖縄戦の終結は日本の戦争終結日、8月15日より遅い9月7日である⁽¹⁴⁾。

(鈴木陽子)

2. 糸数アブチラガマ入壕体験、平和の礎

ガイド：川満彰氏

(沖縄平和ネットワークガイド・大学非常勤講師)

「沖縄の人はそれを体で知っている」「住民は皮膚感覚ですぐわかる」、平和ガイドの川満彰氏は、糸数アブチラガマに向かう車中における沖縄戦についての説明の中で、沖縄住民を多く巻き込んだ過酷な陸上戦の記憶について、繰り返しそのように表現した。

糸数アブチラガマは、南城市玉城字糸数にある自然洞窟（ガマ）で、かつては沖縄戦時における糸数住民の避難指定壕であったが、やがて日本軍の地下陣地・倉庫として使用され、戦場が南下するにつれて南風原陸軍病院の分室となった場所として知られている⁽¹⁵⁾。

筆者はこのガマの中で川満氏のガイドを聞きながら、氏がいうところの、「体」「皮膚感覚」にあ

(10) 山田朗「大本営の沖縄作戦」「第三十二軍の編成と沖縄作戦」（前掲、沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編 第六巻 沖縄戦』）30-33頁。

(11) 平田守「学童疎開」（前掲、沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編 第六巻 沖縄戦』）372-373頁。

(12) 大城将保「根こそぎ動員」（前掲、沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編 第六巻 沖縄戦』）84-97頁。

(13) 林博史「米軍の沖縄作戦」（前掲、沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編 第六巻 沖縄戦』）56-62頁。

(14) 吉浜忍「沖縄戦の展開」（前掲、沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編 第六巻 沖縄戦』）105-124頁。

(15) 2023年1月10日当日に配布された南部観光総合案内センター発行のパンフレット「糸数アブチラガマ～平和への願いを新たに～」を参照。

る戦争の記憶にふれる方法のひとつが、語られる実際の現場に身を置くことだと教えられた。入壕体験は、視覚、聴覚、嗅覚、触覚などの刺激に加え、暗く、閉塞感があり、さらに足元が安定しないガマの中を歩くため、舌が応にも体験者の体に負荷が掛かる。額に汗が滲むような体験と相まって、川満氏の語った内容を真にせまるものとして捉えることが出来た。

続いて訪れた平和祈念公園の平和の礎は、国籍及び、軍人・民間人の区別なく、沖縄戦などで亡くなったすべての人々を悼み、戦後の平和を願い、戦争の悲惨さを象徴的に伝える場所である⁽¹⁶⁾。筆者は戦没者の氏名を刻んだ石碑が間断なく海岸沿いに並んだ景観に圧倒された。

この二箇所をハンセン病問題における語り部機能継承の課題に重ねると、学ぶべきことがいくつかある。まず、歴史を伝えるその現場の雄弁さを活かすことが有効であることが判る。一例に、すでに長島愛生園歴史館が行っているが、実際の回春寮(収容所)の内部を来館者に案内することは、訪れた人が入所者の経験を追体験することにも繋がり、ハンセン病問題に関する理解を効果的に深めている。

他方で、それぞれの施設で改善や工夫がされつつあるにせよ、現場を体験する学習は、どこまで障害のある方の参加を前提にしているのだろうか。この課題に対しては、入壕体験は少なくとも車椅子利用者にとっては入ることが難しいが、一部のバリアフリー化の実践はガマを再現した南風原文化センターや、ひめゆり平和祈念資料館で見ることが出来、それぞれの施設に適材適所の役割があることも学ぶことが出来た。

また平和の礎では、個々の尊厳をいかに伝えるかを考えさせられた。モニュメントは、象徴的に見せるその目的のために、時にふくらみのある情報を削ぎ落としてしまう傾向があるようだ。一例に、氏名を見ることだけでは伝わりづらい事柄として、朝鮮ルーツの戦没者が創氏改名後の日本の名前前で表記されている場合があると川満氏はいう。また、戦没時の年齢も礎を見るだけでは判ら

ない現状がある。

以上を踏まえると、ハンセン病問題における語り部継承の課題は、歴史を平面的な枠組みに収めるのではなく、過去の出来事を立体的に捉えなおし、それを現在と地続きにあるものとして語り続けることである。そのための手掛かりとなるのは、歴史を伝える現場の雄弁さを、豊かな情報をそぎ落とすことなく啓発の場で活かすことである。合わせて、利用者のニーズに合わせた適材適所のバリアフリー化も検討しなければならない。

(吉國 元)

3. 沖縄陸軍病院南風原壕群入壕体験、南風原町立南風原文化センター展示見学

平良次子氏 (同センター館長)

講話「南風原文化センターの「平和」事業」

入壕体験では2グループに分かれて、それぞれ南風原平和ガイドの会のガイドがついた。コロナの関係で壕の中は常に1団体、人数も限定、時間をずらしての入壕となった。入口では壕の解説と中では言葉の案内をせず指で指し示すとの説明を受け入壕、通り抜けたあと入壕口まで戻り、一人ずつ当時の壕の中の臭気を再現した瓶の臭いをかぐことができた。

南風原文化センターは各自で見学した。町立博物館の役割を持つ文化センターの常設展示は、「南風原の沖縄戦」「戦後ゼロからの再建」「移民」「人々の暮らし」の4テーマで構成されている。近現代史(沖縄戦と戦後)と民俗に集約され、通史としての古代~近世の展示や芸術部門の展示は見られない。町として一番訴えたいこと・見てもらいたいことを中心に据え、それ以外は他の展示場所で学んでもらうという徹底ぶりであった。特に展示の最初が陸軍病院南風原壕の復元で、実際よりは消防法の関係で小さくなっているとのことであるが、当時の様子が再現され、実際の壕の見学と合わせると相乗効果が大きいと考えられる。また人々の暮らしでは人の一生を図式化したり、民家を再現したりするなどより分かりやすくリアルに感じられる展示となっている。ワークシートなど

(16) 「県営 平和祈念公園」のウェブサイト参照。https://heiwa-irei-okinawa.jp/facility/heiwanoshiji/ (最終閲覧日: 2024年2月2日)。

子どもたちも取り組める展示の補助資料も用意されている。

文化センター平良次子館長の講話では、センターの紹介や病院壕の文化財指定の経緯と活用、壕内臭気の再現や平和創造劇「卒業証書」の上演など、これまで取り組まれてきた事業などの内容についてお話があった。1989年設立、年間約2万人の来館者でその8割が修学旅行など県外の来館者というセンターが一貫して取り組んできたことは、沖縄戦を如何に伝え、如何に残していくかという点であろう。センターの基本的な考えとして、人々を結び、地域や学校の声に応え、世界と足元を見つめようということと館長は述べた。80年前にこの地で行われた戦争を次の世代に伝えていくために今を生きる人々が多くのことに取り組み、これらの成果を上げてきたのである。現在も他県出身のガイドも含めた南風原平和ガイドの会が継続し、地域に根差しながら病院壕のガイドを続けている。

(木下 浩)

4. 世界遺産座喜味城跡

ユンタンザミュージアム

上地克哉氏（読谷村文化振興課課長）

講話「臭いの再現展示について」

南風原町にある沖縄陸軍病院南風原壕群20号（以下、20号壕）では、2015年1月から壕の中の臭いを再現した“臭い”を見学者に対して公開している。この“臭い”は、2014年度に事業化し作製したものだ。“臭い”は壕と合わせて公開することで、「戦争の実相をより具体的に追体験するとともに、平和とは何かを考えて戦争を拒否し、残されてきた遺跡や証言を後世へと正確に継承していくこと」⁽¹⁷⁾を目的としている。

この“臭い”の再現に携わった上地克哉氏から、再現の過程や公開の際に気をつけていることなどを伺った。

再現にあたり、まず、南風原文化センターにある20号壕の再現展示を手がけていた元看護婦の方々に協力の依頼をした。しかし、“臭い”の再

現に対しては「もう苦しめないでちょうだい」と断られてしまった。これには上地氏も「浅はかだった」と感じ、戦争経験者の傷の深さを改めて確認したそうだ。その後、元ひめゆり学徒隊4名と南風原町出身で20号壕に避難した経験のある男性の協力を得ることになった。

“臭い”の再現は体験者の聞き取りと試作を繰り返すことで進められた。「死臭」や「膿の臭い」といった身近にない臭いの情報が多く出され、作業は困難だった。5か月を要し、体験者から「当時の壕内の臭いに近い」という感想を受けて“臭い”の再現を完成とした。

“臭い”の公開は、ガイドが見学者に当時の状況を説明し想像してもらいながら、20号壕を見学する前か後におこなっている。その理由は「臭いだけを一人歩きさせない」ためだ。20号壕内部の様子、体験者の証言、そして再現した“臭い”はセットになっているため、一つだけを取り出しても追体験にはならないからだ。

お話を聞いて、ハンセン病療養所でも“臭い”をテーマにした展示は可能だと感じた。回復者の証言に登場する消毒剤の臭いなどは再現しやすいだろう。一方で難しいのは再現した“臭い”の公開の仕方だ。上地氏が「臭いだけを一人歩きさせない」と話されたように、ただの臭いの展示にとどめず追体験するには空間の再現を目指す必要がある。回復者の経験が、発症から入所、所内生活と長期に渡るハンセン病問題において、どの部分を追体験すれば理解できるか、効果的な“臭い”の再現するには多くの検討が必要だと感じた。加えて嗅覚には個人差があるので、見学者が期待通りの反応をすることは限らないことにも注意がいる。

(澤田大介)

5. チビチリガマ

ガイド：比嘉涼子氏（読谷地域ガイド風の会）

沖縄戦で米軍が沖縄本島に上陸して間もなく、上陸地点に近いチビチリガマでは、避難した地域住民140名のうち83名が集団自決により命を落とし

(17) 上地克哉「沖縄戦における陸軍病院壕内の「ニオイ」の再現」(『REKIHAKU』第7号、2022年10月) 38頁。

た。現在、ガマの入口には犠牲者を弔う石碑と平和の像が建てられている。その入口で地域ガイド風の会の比嘉涼子氏のガイドを聞いた。

比嘉氏は沖縄県の東村出身で元々バスガイドをしていた。バスガイド時代、案内していた県外の団体客が、ガマに手を合わせる高齢の女性に気安く話しかけて「あんた達に何がわかるか」と怒りをぶつけられたことや、県外から訪れた高校の先生から「住民がどんな思いで亡くなったのか語らなくていいのか」と問いかけられたこともあった。しかし、その思いに十分応えることができないもどかしさを持ったまま、バスガイドを退職せざるを得なくなった。その後、様々な出会いがあって2000年に読谷村で地域ガイド風の会を立ち上げる⁽¹⁸⁾。

そのような経緯を持つ比嘉氏の話は情熱的で終始圧倒されるばかりだった。チビチリガマでの集団自決を教訓とし、戦争は人を人でなくさせること、教育によって歪められた認識は人をも殺すということ、そして、「生かされていることにプライドを持って」と呼びかける。「命の大切さ（ぬちどう宝）」をストレートに伝える話しぶりは感情を揺さぶるものだった。一方で、沖縄戦の実相より「命の大切さ」を伝えることに重きを置いたガイドは、感情が強く込められているために人によって受け取り方に差が生まれかねない、全体的な話がチビチリガマについて触れた内容が少ない、といった指摘が出された。

一長一短あるものの、実相よりも想いを重視するガイドの必要性は無視できないとも感じる。比嘉氏は更生保護女性会として、チビチリガマ荒し事件⁽¹⁹⁾を起こした少年達の社会貢献活動に関わり、その活動を通して少年達から反省の言葉を聞いたそうだ。比嘉氏の人柄に依る部分もあり、どのような話をされたかわからないため想像になるが、おそらく私たちが聞いたような情熱的な話しぶりだったからこそ、引き出せた言葉だったのだろう。これをそのままハンセン病療養所に導入するのは難しいが、実相を踏まえて何を伝えたいか、

その想いの部分を重視したガイドは今までとは違うニーズを満たせるものになると感じた。

(澤田大介)

6. 嘉数高台公園、沖縄国際大学米軍ヘリコプター墜落跡

沖縄国際大学平和ガイドサークル「Smilife」

沖縄本島中部の宜野湾市にある嘉数高台公園は、沖縄戦時の激戦地であった場所で、今でも日本軍が使用したトーチカ（防御陣地）や戦闘時の弾痕が残る壁、嘉数の住民の慰霊塔などが建てられている。さらに米軍普天間基地の全景を見ることができ、米軍基地という戦後から現在までの問題を考えることのできる場所である。

ガイドを依頼した沖縄国際大学の平和ガイドサークル「Smilife」は、主に県外の修学旅行生を対象に、沖縄戦の戦跡を巡りながら平和についてのガイドを実施している。利用者の内訳は沖縄県外9割、沖縄県内1割である。

同大学では、「平和学」というコースがあり、沖縄戦や戦後の沖縄について学ぶカリキュラムがある。このコースで得た知識を外に発信していく場として、平和ガイドサークルが大きな役割を果たし、かつこのコースの存在が大学生による継続的なガイドの実践を可能にしている。

今回、ガイドをしていただいた2名の大学生は、沖縄戦をはじめて学ぶ人に分かりやすく伝えることに重点を置き、例えば「たこつば戦法」など言葉だけでは伝わりにくい内容については、イラストなどとともに描いたスケッチブックを参加者に見せながら説明するなどの工夫をしていた。

また、学生たちがガイドをするうえで「中立性」を重視しているということも特筆すべき点である。2019年に行われた辺野古基地の埋め立てに関する住民投票では、7割の住民が反対するも、2割の賛成があり、沖縄県の中でも基地の受け入れにあたって様々な考えがある。そういった現状の中で、一方的にガイドが基地反対の意見を述べれば、それが沖縄県民の総意と認識されてしまうお

(18) 大城志織「沖縄戦の怒り後世に 戦世伝える地域の試み4」(『沖縄タイムス』2019年6月25日朝刊) 21頁。を参照。

(19) 2017年9月12日にチビチリガマの内部が荒らされていた事がわかった事件。
宮城久緒「チビチリガマが破壊 内部荒らされる 遺骨や遺物、折り鶴も 遺族「ひどすぎる」」琉球新報電子版、2017年9月15日10:10更新、<https://ryukyushimpo.jp/news/entry-573674.html> (最終閲覧日: 2023年11月10日)。

それがある。実際のガイドでは、騒音や振動の被害を伝えるだけでなく、米軍基地内において留学をする学生や仕事を持つ人、アメリカ人の兵士と結婚した日本人などが存在することなど、事実を伝えることを重視している。

戦争体験者の話は当事者としてのインパクトが大きいことは確かであるが、非当事者である大学生ガイドの語りには、今を生きる若い世代なりの、沖縄戦から学んだ伝えたいメッセージがある。今回、大学生のガイドに参加し、実際に沖縄戦を体験したことがない者にこそ、同じ非体験者の立場に立ったガイドが実現できる可能性があると感じた。

(橋本彩香)

7. 佐喜眞美術館展示見学

佐喜眞道夫氏 (同館館長)

講話「アートがつなぐ場所と記憶」

宜野湾市にある佐喜眞美術館では、丸木位里・俊夫妻が描いた『沖縄戦の図』(1984年)、『チビチリガマ』(1987年)及び、『シムクガマ』(1987年)の連作に囲まれて、館長の佐喜眞道夫氏による、これらの絵の講話を聞いた。

特に『チビチリガマ』に関しては、前日に描かれたその場所を訪ね、読谷地域ガイド風の会の比嘉涼子氏のガイドを聞いたので、丸木夫妻が描いたことを、より具体的に感じる事が出来た。チビチリガマにおける強いられた集団自決は、現在も風化することのない地域住民の記憶であり、その凄惨さを訴える比嘉氏の語りは、それを描いた丸木夫妻の絵と、沖縄戦における歴史認識という点で、ほとんどブレもせず重なり合っているように思えた。

戦争を描いた作品は美術史においても先例があるが、その作品のあり方が、地域における戦争の記憶と限りなく接近する事例⁽²⁰⁾は類例がほとんど無いであろう。これには、過酷な陸上戦を伝えるために、160冊以上の文献を読み、研究者及び、

生き残った住民の体験談を聞いて制作に挑んだ⁽²¹⁾丸木夫妻の信念に加え、佐喜眞道夫氏が強調した通り、『沖縄戦の図』の連作が沖縄にあるということが大きく寄与している。

また、佐喜眞加代子氏による美術館の屋上から見える米軍基地についての語りも忘れられないものとなった。それは、作品のみならず、外の社会問題にも目を向けてほしいという館の力強いメッセージであった。

一方、国立ハンセン病資料館ではハンセン病療養所の入所者の芸術作品を紹介し、それらを患者・回復者の「生きている証」とし、活動は「生きがいづくり」と位置付けている⁽²²⁾。これに対して、佐喜眞美術館における丸木夫妻の作品の意義にふれると、芸術表現には怒り、抗議、告発などの側面もあり、それらは、患者・回復者の芸術作品を見る私たちの側の一方的な評価を揺さぶるものであることに気付かされた。

丸木夫妻と住民側にとっては、絵を描きあげることが、戦争の記憶の忘却に抗うことであった。その絵は、語らねばならぬという住民側の思いと、聞かなければならないという夫妻の思いに裏打ちされている。筆者は語る側と聞く側との共同作業ともいえる絵画表現の可能性についても、目を開かれる思いがした。ハンセン病問題の語り部機能継承に関しては、当事者の聞き取りやその証言の映像化などが進められているが、それを共同作業として捉え直す可能性についても今後の検討が必要である。

(吉國 元)

8. ぎのわんセミナーハウス

山城彰子氏 (地域史編纂・大学非常勤講師)

講話「沖縄の地域史の取り組みの紹介」

沖縄における地域史編纂事業の現状と課題について、北中城村史編纂委員で大学非常勤講師の山城彰子氏の話聞いた。他県ではほぼ終了しつつある市町村史編纂事業が沖縄県では今でも活発に

(20) 佐喜眞氏の著作には、「この人は私のおじさんです」「絵の中に思わず肉親の姿をさがしました」という絵を見た人々の反応が記されている。佐喜眞道夫『アートで平和をつくる 沖縄・佐喜眞美術館の軌跡』(岩波書店、2014年)56頁。

(21) 佐喜眞美術館編『丸木位里・丸木俊 共同制作 沖縄戦の図』(佐喜眞美術館、2006年)。

(22) 国立ハンセン病資料館編『国立ハンセン病資料館 常設展示図録2020』(国立ハンセン病資料館、2020年)92頁。「生き抜いた証」とも言える。

編纂されており、山城氏は中城村や南城市、そして現在も編纂中の北中城村などの編纂の中心的な存在として活動されてきた。

沖縄県における市町村史編纂事業の大きな目的の一つは、「沖縄戦で何を失くしたのかを知るために、そしてそれを取り戻すために聞き取りなどを行い後世に残していく」ということである。そのため、市町村史の構成にも他県と大きな違いがみられる。山城氏が提示した南城市史の『南城市の沖縄戦 資料編』⁽²³⁾や『南城市の沖縄戦 証言編一大里一』⁽²⁴⁾、あるいは山城氏がお手本と指摘した『読谷村史』の一連の沖縄戦関係の資料編⁽²⁵⁾など、沖縄戦を大きく取り上げ、沖縄戦だけで何冊にもわたる構成をとる市町村史も多い。他県の市町村史ならば、通史編の中に「戦前・戦後の〇〇市」などと組み込まれることがほとんどであるが、沖縄では編纂事業の目的の通り、沖縄戦、さらにはその多くを聞き取りの記録が占めていることが特徴的である。

山城氏が述べるころの地域史編纂の方法としては、場所の調査や残された史料調査も行うが、一番核となるのが「人に会う」ことである。そしてそれは抽出調査ではなく、悉皆調査を行うことが重要であり、沖縄戦によって一家全滅してしまった家を周囲も含めた全員の調査で浮かび上がらせることがその理由だという。つらい体験から立ち直り、やっと語っていただけるようになった体験者が存命な今のうちに聞き取り、記録していくことが市町村史の使命であり、首長や行政もそれを後押ししてきた。その結果として、多くの沖縄戦を記録した市町村史が編纂され、字誌というさらに小さい単位にまで沖縄戦の記録が広がっていき、それらの活動に呼応して若い研究者が力をつけてきているなどの成果も上がっている。

しかし課題も見られる。体験者の高齢化が進み、距離を遠く感じることから聞き取りの難しさや、かつては体験誌を残すことに問題ない社会風土であったが、現在では首長が変わるとその事業自体が存続を認められない事例も増えているとい

う。さらに山城氏は、悉皆調査でもこぼれ落ちる人たち、例えば移動する人たちの記録をどう残していくのかについてもこれから取り組んでいくことが重要であると述べている。

(木下 浩)

9. ひめゆり平和祈念資料館展示見学

尾鍋拓美氏（同館説明員）

講話「ひめゆり平和祈念資料館の次世代継承と今後の課題」

沖縄本島最南端の糸満市に所在するひめゆり平和祈念資料館は、1989年に建設された民営民立の資料館で、ひめゆり学徒隊とよばれる戦中に看護要員として動員された10代の女子学徒の沖縄戦の体験を伝える資料館である。開館までの展示づくりや、その後の運営の中心を担ってきたのは、戦争体験者である元ひめゆり学徒隊であった。

2000年代に入ると、同館の運営を担ってきた体験者の高齢化によって次世代への継承の課題が認識されるようになった。この課題を解決するため、体験者の発案で次世代プロジェクトが非体験者である職員とともに始められ、①証言映像の記録化、②解説がなくても分かりやすい展示への更新(2004年)、③「証言員」とよばれる体験者による展示解説や戦争体験講話などの後継者の育成(2005年～)などが取り組まれた。

③の取り組みについては現在、非体験者である学芸員と、主に「平和講話」という団体向けプログラムを担当する「説明員」とよばれる職員によって引き継がれており、証言員による戦争体験講話の実施は2015年をもって終了した。

今回、継承についての講話を依頼した説明員の尾鍋拓美氏は、2006年に同館に採用され、証言員であった宮城喜久子氏とともに、同氏がこれまで行ってきた戦争体験講話を引き継ぐ準備を開始した。

尾鍋氏の講話では、宮城氏が教師を目指して沖縄県立第一高等女学校に入学したことから、戦争が学校生活に入り込んでくる様子、ひめゆり学徒

(23) 「南城市の沖縄戦資料編」専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』（南城市教育委員会、2020年）。

(24) 南城市教育委員会文化課市史編さん係編『南城市の沖縄戦 証言編一大里一』（南城市教育委員会、2021年）。

(25) 例えば、読谷村史編集委員会編『読谷村史 第5巻 資料編4 戦時記録』上巻・下巻（読谷村、2002年、2004年）など。

隊として動員されたあとの病院壕での経験やそのときの思いなどを紹介したのち、宮城氏による10分程度の証言映像を上映した。内容は、1945年6月に日本軍から学徒隊に言い渡された解散命令から、まもなくして米軍の捕虜となるまでの話と次世代へのメッセージである。上映後、証言員ははじめから自身の戦争体験を話せたわけではないという尾鍋氏からの補足説明があった。このように体験者の証言が説明員によって補完されることで、体験者が抱えてきた苦しみに思いを馳せ、記録された証言映像の重みをより深く感じられる効果を生み出している。

同館が実施している平和講話の特徴は、沖縄戦についての説明は最低限に抑え、一人のひめゆり学徒の経験に焦点を当てる形で構成されていることである。これは体験者がまだ活動をしているうちから始められた同館の次世代への語りの継承の取り組みの成果であり、沖縄戦という歴史的事実からではなく、体験者の経験や思いから戦争の悲惨さや命の大切さを学ぶという点で先駆的な取り組みであると感じた。

(橋本彩香)

10. 語り部機能継承勉強会調査のまとめにかえて

2019年からハンセン病問題の語り部機能継承勉強会を実施し、戦争、公害、民族、自然災害など様々な分野での語りの継承について調査を行った。また2023年には沖縄戦の継承の現状の調査を行った。

それら多くの課題において、当事者の高齢化や、それを引き継ぐ人たちの工夫や葛藤が見られ、ハンセン病問題における語り部機能継承という課題において多くの示唆を得ることができた。この度の調査で示された様々な手段は、どれも先人たちの知恵と工夫の結晶である。あらためてご協力いただいた皆様に御礼申し上げたい。

その上で、ここではそれらの調査結果を元に、語りを継承するという行為を分類し、まとめたい。

継承手段の分類

- 1 憑依型 話者が語り部本人になりきり伝える語り部本人の言葉をそのまま見学者に伝える方法。話者本人の力量に左右される部分が大きく、話者の感情も加味されることもあるため、難易度は高い。
- 2 代入型 対話以外の方法を用い、直感的に伝える
展示や史跡、アートなどを利用する方法。見学者の理解度によるところも多いため、事前の準備や伝え方の工夫が重要となる。
- 3 第三者型 関係者が第三者的に伝える
残された証言や映像を用いて、話者が第三者的に伝える。

各地の取り組みを踏まえ、上記の通りごく簡単に分類を行った。どこの取組も単体で行っている場合は少なく、組み合わせで活用しているケースがほとんどであった。これらを踏まえハンセン病問題の語りの継承について考えてみたい。

今まで私たちはハンセン病問題の啓発を当事者の「語り」に頼っていた部分が多い。その内容は、ハンセン病問題の概略を踏まえながら、その当事者自身が体験した出来事に加え、当事者が願うことを見学者に伝えていることが多い。また、ハンセン病問題からの学びを、国家の監視、社会の無関心への啓発、差別の怖さ、人権侵害の実例、生き抜く強さの提示、感染症に対する忌避感への警鐘など、その当事者がどこに重点を置くかでその内容も変化する。重複する部分もあると思うが、それは十人の語り部がいれば十通りの語りや願いがあることを意味する。見学者にとっては対応した当事者からの情報が大きく、他の「語り」については見落とされがちとなる。この点は当事者任せの啓発事業の限界であるとも言える。

また、当事者の高齢化が顕著である現状を考えると、近い将来この「語り」は何らかの形を変えざるを得ない。上記のどの型を使用し見学者に伝えるにせよ、重要なのはその当事者は何を語りたかったのか、そして何を願っていたのか、という「語りの本質」を明確にしておくことである。そして語り継ぐべき人が「語りの本質」を踏まえ、

多面的な語りを構築することができれば、その語りはより重層的な「語り」となるはずである。それは当事者でないからこそできる語りであるとも言える。

そのうえで手段の在り方は、基本的には「語りの本質」の具現化にむけて最適な手段を複合的に用いることが重要となる。それは上記の型に加え、仮想現実やAIを使った全く新しい方法も検討可能である。この点は追って検討を行う必要がある。

語り部機能の継承という点、どうしてもその手段の在り方が議論されがちであるが、重要なのは「語りの本質」の明確化と具現化である。

(田村朋久)